

山を讃する文

小島烏水

青空文庫

近來邦人が、いたづらなる夏期講習會、もしくは無意義なるいはゆる「湯治」「海水浴」以外に、種々なる登山の集會を計画し、これに附和するもの漸く多きを致す傾向あるは頗る吾人の意を獲たり、しかも邦人のやや山岳を識るといふ人も、富士、立山、白山、御嶽など、三、四登りやすきを上下したるに過ぎず、その他に至りては、これを睹るにと、宛ら外国の山岳の如くなるは、遺憾にあらずや。

例へば東京最近の山岳国といへば、甲斐なるべくして、しかも敢へて峽中に入り、峻山深谿を跋涉したるもの幾人がある、今や中央鉄道開通して、その益を享くるもの、塩商米穀商以外に多からずとせば、邦人が鉄道を利用するの道もまた狭いかな、偶ま地質家、山林家、植物家らにして、これらの人寰を絶したる山間谿陰に、連日を送りたるものあるは、これを聞かざるにあらずといへども、しかもかくの如きはこれ、漁人海に泛び、樵夫山に入ると同じく、その本職即ち然るのみ、余の言ふところの意はこれに異なり、夏の休暇は、衆庶に与へられたる安息日なり、飽食と甘睡とを以て、空耗すべきにあらず、盍くんど自然の大堂に詣でて、造花の威嚴を讃せざる、天人間に横はれる契点を山なりとすれば、山の天職たるけだし重く、人またこれを閑却するを許さざる

なり。

余今夏、友人紫紅山崎君と峽中に入る、峽中の地たる、東に金峰の大塊あり、北に八ヶ岳火山あり、西に駒ヶ岳の花崗岩大系あり、余らの計画はこれらの山岳を、次第に巡るに在りて、今や殆どその三の二を遂げたり、而して上下跋涉の間、心胸豁如、洞朗、昨日の我は今日の我にあらず、今日の我はおそらく明日の我にあざらむ、而してこれ向上の我なり、いよいよ向上して我を忘れ、程を逐ひて自然に帰る、想ひ起す、昨八ヶ岳裾野の紫蕊紅葩に、半肩を没して佇むや、奇雲の夕日を浴ぶるもの、火峰の如く兀々然として天を衝き、乱焼の焰は、茅萱の葉々を迂りて、一泓水の底に聖火を蔵す、富士山その残照の間に、一朵の玉蘭、紫を吸ひて遠く漂ふごとくなるや、桔梗もまた羞ぢて蒼を垂れんとす、眇たる五尺の身、この色に沁み、この火に焼かれて、そこになほ我ありとすれば、それは同化あるのみ、同化の極致は大我あるのみ、その原頭を、馬を牽いて過ぎゆく僮夫を目送するに、影は三丈五丈と延び、大樹の折るる如くして、かの水に落ち、忽焉として聖火に冥合す、彼大幸を知らず、知らざるところ、彼の最も大幸なる所以なり、ああ、岳神、大慈大悲、我らに代り、その屹立を以て、その威嚴を以て、その秀色を以て、千千萬古天に祈祷しつつあるを知らずや。

徂徠^{そらい}先生その『風流使者記』中に曰く「風流使者訪名山」と。我らは風流使者にあらず、しかも天縁尽きずして、ここに名山を拝するの榮を得、名山が天を讃する如くにして、人間は名山を讃す、また可ならずや。

駒ヶ岳の麓、台ヶ原の客舎に昼餐を了^{おわ}りたる束の間に、禿筆を舐^なぶりて偶感を記す、その文を成さざる、冀^{こいねがわ}くは我が興の高きを妨ぐるなからむ。

青空文庫情報

底本：「山岳紀行文集 日本アルプス」岩波文庫、岩波書店

1992（平成4）年7月16日第1版発行

1994（平成6）年5月16日第5刷発行

底本の親本：「小島烏水全集 全十四巻」大修館書店

1979（昭和54）年9月～1987（昭和62）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：大野晋

校正：地田尚

1999年9月20日公開

2003年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山を讃する文

小島烏水

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>